

# 言語文化学の構築を目指して

奈良 毅

## Culturo-linguistics—A Preliminary Step

NARA, Tsuyoshi

### Abstract

The author's proposed culturo-linguistics is a new domain of linguistic research for finding and describing the correlations of linguistic forms with their corresponding cultural features (or cognitive patterns of the native speakers concerned) which are established as social conventions of the speech community to which the native speakers belong.

The author's wish for developing this new discipline has been motivated by his dissatisfaction with and criticism against the description as found in existing grammars as well as dictionaries. The author observes that any of the existing grammar books or dictionaries often lacks the information essential for correctly comprehending or composing the linguistic and cultural patterns established as social convention of the speech community concerned.

For instance, there are quite a few linguistic forms (inflectional or conjugational) which are grammatically correct in that language but never accepted or used in that speech community. There are also many such words, phrases or sentences (including so-called idioms) whose correct meanings one cannot get unless one has the appropriate information about certain cultural features of that speech community.

This paper consists of the following sections:—

[0] Introduction, [1-1] Verbal Conjugational Forms, [1-2] Human Relational Expressions, [1-3] Yes-No Expressions, [2-1] Animate / Inanimate Distinction in Verbs, [2-2] Animate / Inanimate Distinction in Case Markers, [2-3] Animate / Inanimate Distinction in Mobile Character, [2-4] Noun / Numeral Classifiers, [2-5] Emotional Suffixes, [3-1] Demonstrative Pronouns by Distance, [3-2] Demonstrative Pronouns by Distance & Visibility, [3-3] Demonstrative Pronouns by Distance, Direction, Visibility & Audibility, [4-1] Divisions of Time & Day(s), [4-2] Time Concepts Expressed in Verbal Conjugations, [5] Semantic Features of Some Verbs, [6] Numeral Composition and [7] Idiomatic Expressions.

## [0] はじめに

筆者が構築しようとする言語文化学とは、既に社会慣習として確立している言語的・文化的諸特徴を研究対象とし、両者の相関関係を科学的に記述することを目的とする学問である、と定義したい。

具体的に言えば、ある母語使用者 (native speaker) の発話行為に繰り返し現れる言語的特徴が、当人の認識するどの文化的特徴 (発話内の対象に対する心情や認識のしかた) に対応するかを記述することが中心となる。そしてこのことは、当然ながら、言語的特徴の中に含まれる当該言語の音韻・形態・統辞・語彙等々の諸特徴が、発話者個人ではなく、その言語社会構成員全てが認識する社会習慣を反映していることを前提にしている。

では次に、記号学や言語学の中の新しい研究分野として、言語文化学なるものを筆者が構築しようとするに至った動機ないし背景について述べてみたい。

アジア・アフリカ言語文化研究所 (通称 A A 研) は、東京外国語大学に付置された人文系の全国大学共同利用研究所として1964年 (昭和39年) に発足するが、同じ年度に所員として採用され、同研究所の歴史とともに歩み続けてきた筆者は、今年で丁度30年を迎えることとなる。この間、現代インド・アフリカ諸語に重点を置いた南アジア諸語の研究に従事し、電算機補助による辞書編纂や言語研修の事業にも深く関わってきた。言語理論としては、特に多言語接触地域における比較言語学理論の検証と、南アジア諸語相互間および日本語との間の対照研究方法の確立のため、いささか努力精進をしてきたつもりである。

さて、こうした経験を通じて最近筆者が強く感じるようになったのは、既成の語学書の文法記述や辞書内容に対する不満である。そしてその不満は、みづから南アジア諸語の中のいくつかの言語の文法書や語彙集を作ったり、日本人を対象とする言語研修用の教科書

を作って実際にその効果をためしたりしているうちに、ますます増大し、ついに、従来の文法記述や辞書内容に、ある視点や情報が欠けていることに気づくに至ったのである。

具体例をあげると、ある言語の動詞が活用する場合、すべての活用形式とそれぞれの形式のもつ文法的意味や機能、さらには活用の種類や型については、従来の文法書はほぼ漏れなく記述してあるし、例外的な形式がある場合でも、優秀な文法書であれば、きちんとそれに言及し適切な説明を加えてあるはずである。したがって、学習者がこうした形式変化のパラダイム (変化する品詞の個々の形式を格・人称・数・時制・相などの文法範疇に従って示した語形変化の一覧表) を頭に入れ、変化規則を正しくて適用して生成する形式は、すべて文法的に正しい形式 (grammatical form) ということになる。

ところが、ここにこそ実は学習者にとって大きな落とし穴があるということを知らなくてはならない。なぜなら、文法的に正しい形式のすべてが、必ずしも母語使用者 (native speaker) によって正しい言語形式と認められ、受け入れられるわけではないからである。

もっとも、「母語使用者に受け入れられる言語形式のみが文法的に正しい形式である」と、定義を改めるなら話は別であるが、そうでない限り、文法的に正しいすべての変化形式の中には、母語使用者によって正しい言語形式として受け入れられるものと、受け入れられないものがある、ということになる。したがって、学習者は社会慣習として確立している言語形式と、そうでないものを識別する必要があり、こうした識別のための情報が欠けているということこそが、従来の文法書や辞書の記述内容に対し、筆者が不満を感じる最大の理由だったのである。なぜなら、そうした情報が与えられぬ限り、いかに学習者が文法規則を正確に記憶し、それにしたがって忠実に文を生成しようとも、その言語社会に受け入れられる正しい言語形式のみを常

に生成できるとは限らないからである。

つまり、外界のあらゆる現象や存在物を母語使用者がどう認識し、どう分類し、どう記号化するかという心理傾向（発話者の内界における精神文化的特徴）を知らぬ限り、非母語使用者は、いかにその言語の文法や語彙を正確に学習したところで、社会習慣として確立している正しい言語形式を常に生成することは決してできないであろう。

このように、構造主義に基づく記述言語理論であれ、生成・変形文法に基づく言語理論であれ、筆者が上に指摘した言語・文化的特徴に関する情報を含め限り、いかなる文法記述も語彙記述（辞書内容）も、学習者が常に正しい言語形式を生成する助けとはならないことが、わかってもらえることと思う。

こうした理由により、言語研修（第二言語習得）という実用的な目的からしても、また情報伝達や翻訳の過程を分析するという理論的な立場からしても、ある特定の言語的特徴がそれに対する特定の文化的特徴と相関々係にある、つまり両者の結びつきが社会習慣として確立していることを検証し、記述することが必要である、と筆者は考えたわけである。

かくして、そのための研究方法を科学的な学問体系にまで育て上げていくべく、『言語文化学』なる名称を付した新しい学問分野の構築を目指した、というわけである。

### [1-1] 動詞活用形について

次に、現実にある自然言語から、いろいろな具体例を引き出し、言語文化学的考察を加えていってみたい。

まず、最も単純でわかりやすい例として、英語と日本語による次の文表現について説明してみよう。

- A. Do you know this man?  
 B. Yes, I do.  
 a. 君はこの男を知っているかい。

b. うん、知ってる。

日本語の上の文表現を聞いた日本人なら誰でも、その中に次のような情報が含まれていることがわかるはずである。

- ① 発話者二人 (a, b) とともに男性である。
- ② a と b は、ほぼ同じ年令で、わりあい親しい関係にある。
- ③ a は、「この男」に対し、あまり好い感情は持っていない。
- ④ a は、b が「この男」を現在知っているかどうか、という事実を知りたがっている。
- ⑤ b は、自分はその男を知っている、という事実を a に知らせている。

しかし、非日本人が同じ文表現を聞いた場合、たとえその人が日本語の文法を正しく学習していたとしても、①から⑤までの情報を全部その表現から汲みとることは、まず無理なのではなかろうか。せいぜい④と⑤がわかる程度で、よほど日本語に習熟した人でないと①の情報まで汲みとることは出来ないかもしれない。

さて一般に、日本語を学習して間もない非日本人が、自分の知っている日本語の知識で、A, B の表現に相当する日本文を作るよう指示された場合、この人は次のような日本文を作るかも知れない。

- a'. \*あなたはこの男を知りますか。  
 b'. \*はい、知ります。  
 a'': \*あなたはこの男を知るか (い)。  
 b'': \*はい、知る (よ)。

上の文表現は、いずれも「知る」という動詞の現在形を正しく生成して使っている以上、文法的には正しい文と認めてしかるべきであろうが、「現在知っているかどうか」の事実を確かめる場合、日本語には「知ります／知る」の現在形を用いる習慣はなく、必ず「知っています／知っている」という現在進行形

ないし未完了形を用いる社会習慣が確立していることを知らなくてはならない。

では、どのようにしてそういう社会習慣が出来上がったのかという歴史的過程を実証することは難しいが、日本語動詞のいわゆる現在形は、主語の動作ないし状態がかなり高い確立で未来に実現される場合にも使われるので、現在の動作ないし状態のみを示すためには、むしろ現在進行形の方が適切だと判断されたのではあるまいか。また、現在進行形の「…ている」という形式は、ある動作が完了し、その結果もたらされた現在の状態をも示す機能をもっていることと、無関係ではないかもしれぬ。

もしそういう心理が日本人話者の間に働き、「知る」という知的行為の現在の状態を表示する形式としては、現在形ではなく現在進行形の方を使うという社会習慣が確立したならば、それはまさしく日本人の思考ないし認識のしかたを反映したものであり、日本人の言語文化的特徴の一つと言っていいていであろう。

この特徴が日本人特有のものであって、人類すべてに普遍的なものでないことは、英語の動詞が現在形をとり、決して現在進行形をとることがないという事実からしても、明らかである。つまり

A'. \*Are you knowing this man?

B'. \*Yes, I am.

という英文は、文法的には正しい文形式かもしれないが、社会習慣として確立している文形式であるとは決して認めるわけにはいかないであろう<sup>1)</sup>。

## [1-2] 待遇表現

また A, B の英語表現に相当する日本語表現としては、a, b の次のような異文が考えられよう。

### a: 「質問」

| 主語    | 目的語  | 述部                  |
|-------|------|---------------------|
|       | この男を |                     |
| あなた様は | ——   | ご存じでいらっしゃいますか       |
| あなたは  | ——   | 知っておられますか<br>ご存知ですか |
| あんたは  | ——   | 知っていますか             |
| 君は    | ——   | 知ってる?               |
| 貴様は   | ——   | ご存じ?                |
| おまえは  | ——   | 知っているかい             |

### b: 「応答」

|    |    |                     |
|----|----|---------------------|
| はい | —— | 存じております             |
| ええ | —— | 知っております<br>知って(い)ます |
| うん | —— | 知ってる(よ)             |

上記の主部と述部形式のそれぞれの異形態の間で、筆者が可能と考える結合を線で示したが、結合が可能かどうかの判定は個人によって多少の差異が認められるかもしれない。しかしその差異ないし偏異の幅は限られていて、例えば a について、「\*あなた様は 知っていますか/知っている?/知っているかい」とか、「\*おまえは ご存じでいらっしゃいますか/知っておられますか/ご存知ですか」などの結合を可とする日本人はまずいないであろう。また b についても、「\*うん 存じております/知っております/知っています」などの文結合を、社会習慣として確立している文形式・文表現であると認める日本人はいないものと思われる。

こうした文例を、以降「文法的には正しいが、言語文化的には正しくない文である (grammatically correct but culturo-linguistically incorrect sentence)」と呼ぶことにしたい<sup>2)</sup>。

なお A, B; a, b の否定表現を考えた場合、面白いことに、日本語では「知る」の現在形を使うことが可能となり、現在形でも現在進行形でもどちらでも表現できるようになる。

C. Don't you know this man?

c. 君はこの男を知らないかい。

D. No, I don't.

d. うん、知らないな。

C'. \*Aren't you knowing this man?

c'. 君はこの男を知って(い)ないかい。

D'. \*No, I'm not.

d'. うん、知って(い)ないよ。

c と c' の意味上の差異は微妙であるが、筆者自信の内観によれば、c が現時点に限っての事実に言及しているのに対し、c' は、過去のある時点から現時点に至るまでの、ある期間継続している事実に言及しているように思われる。ただし、肯定表現では現在形が言語文化的に正しくないのに、否定表現では正しい形式として何故受け入れられるのかは、今のところ説明ができない<sup>3)</sup>。

従来の言語学では、こうした待遇表現における主語・述語間の呼応形式は、対話者相互間の社会的地位の差や人間関係の差（年齢や親疎の度合いなど）によって生じる言語形式であるとして、主として社会言語学の分野で取り扱ってきているが、筆者はこれらを、対話者同士が自分と相手との関係をどう認識し、それをどの言語形式で表現するかという、言語文化学の問題として扱うことを提案したい。

### [1-3] 質疑応答表現

さてここでもう一つ問題にしたいのは、応答文における肯定・否定の感動詞についてである。英語表現においては、質問形式のいかんにかかわらず、応答者は述部の肯定・否定形に呼応した感動詞の形式を用いなければならないのに対し（Yes [肯定]—do [肯定]、No [否定]—don't [否定]）、日本語表現では、質問の肯定・否定形式と応答述部の肯定・否定形式が一致している時は「はい」を、一致していない時は「いいえ」を用いるのが原則である。

E. Do you know it?

F. Yes, I do.

e. 君は知って(い)るかい。

f. うん 知って(い)るよ。

[肯定—肯定]

E'. Don't you know it?

F'. No, I don't.

e'. 君は知らないかい。

f'. うん 知らないよ。 [否定—否定]

E. Do you know it?

F'. No, I don't.

e. 君は知って(い)るかい。

f''. いや 知らないよ。 [肯定—否定]

E'. Don't you know it?

F. Yes, I do.

e''. 君は知らないかい。／知って(い)ないかい。

f'''. いや 知って(い)るよ。

[否定—肯定]

つまり上の例でわかるように、英語表現では、応答文が肯定の感動詞をとるか、否定の感動詞をとるかは、応答文の述部が肯定形をとるか否定形をとるかによって自動的に定まるのに対し（一方的規定 unilaterally determinative）、日本語表現では、応答文の述部形式だけでは規定できず、それと質問文の述部形式が同じか否かという相関関係において定まる（双方的規定 bilaterally determinative）。そしてこのことは、英語の native speaker が他人の意向とは関係なく自分の意見を強く主張するという、自己中心的文化特徴を持っているのに対し、日本語の native speaker は他人の意向を常に考慮し、相手と自分の意見が同じか否かを確認したのちに自分の意見を述べるという、自他共存の文化特徴をもっていることを、裏付けているように思われる。

こうした現象は、従来の言語学では、discourse analysis（談話分析）の問題として処理してきているが、筆者はそれを、質問者と応答者がそれぞれ相手の観念や心情を考慮にい

れているかいないか、そして肯定・否定どちらの感動詞を用いて応答文を作っているかという、言語文化学の問題として分析してみたわけである。

### [2-1] 動詞による生・無生の区別

次に主語として用いられる名詞と、その存在を示す動詞との関係を論じてみたい。

日本語では、人間を含む動物の存在動詞は「いる」で、非動物の存在動詞は「ある」であるということは、よく知られていることである。例えば、

- g. 魚, 虫, 鳥, 犬, 人, …が「いる」。  
h. 星, 山, 木, 花, 家, 机, 本, …が「ある」。

このことは、言語文化学の立場からすると、日本人は森羅万象を二つの範疇に分類して認識し、一方の存在は「いる」という言語形式で、もう一方の存在は「ある」という言語形式で表現する社会習慣を持つ、ということになる。そしてその二つの範疇の分類基準は、対象が自分の意志で動くことが可能かどうかという点に着眼しているように思われる。日本人の大人がこの範疇分類を誤ることはまずないが、子供が時として、飛行機、汽車、船、自動車などを「いる」という形式と結びつけて表現することがあるのは、これらがあたかも自己の意志で動いているものであるかのように、誤って認識してしまうからであろう。

こうした言語文化的特徴は言語ごとに異なり、日本語では、範疇の違いが存在動詞の形式によって表示されるが、ベンガル語などの場合は、名詞の接辞としての格形式や複数形式の違いによって表わされるし、サンタール語の場合は、人称代名詞の形式に反映される。

### [2-2] 格形式による区別

ところでベンガル人は、すべての対象を人

間と非人間との二つの範疇に識別し、前者を表わす名詞を目的語として文を作る場合、必ず {-ke} という対格接辞を付加するが、後者の場合は何の接辞も加えない（あるいはゼロ形式 {-φ} を加える）。

- i. {baba} (父), {ma} (母), {chatro} (男性徒), {bidefi} (外国人) … {-ke} (を)  
j. {pakhi} (鳥), {kukur} (犬), {phul} (花), {boi} (本) … {-φ} (を)

また人間を表わす名詞は複数接辞に {-ra} をとるのに対し、それ以外の名詞は {-gulo} をとる。

- i'. {baba-ra}, {ma-(e)-ra}, {chatro-ra}, {bidefi-ra} …  
j'. {pakhi-gulo}, {kukur-gulo}, {phul-gulo}, {boi-gulo} …

ただ面白いのは、人間であるはずの {baccha} (子供), {fifu} (赤ん坊), {cakor} (召使い) …などが、複数形に {-ra} をとることも {-gulo} をとることもあり得ることである。この例外的処置は、かつてベンガル人社会がこれらの存在を一人前の人間として取り扱っていない時期があったことを物語のかもしれない。とすれば、先に述べた二つの範疇の分類基準は、対象とする人間が、年令や地位から判断して、一人前の社会構成員と認められるか否かという点に置かれていたのが、いつの間にか、人間であるか否かという別の物差しで識別するように、変移してきたのではあるまいか<sup>4)</sup>。

### [2-3] 可動性による区別

またサンタール人は、すべての対象を靈魂を有するか否かで二つの範疇に識別する言語文化的特徴をもっているように思われる。そして有魂の名詞は、3人称の場合 {単数 nui, 双数 nukin, 複数 onko} という代名詞形をとり、無魂名詞の3人称の場合は {単数 ona,

双数 onakin, 複数 onako} という代名詞形をとる。

- k. 有魂名詞—人間, 動物, 魚, 虫, 太陽, 月, 星, 先祖… など
- l. 無魂名詞—木, 花, 果物, 雨, 土, 田, 道, 米, 家, 衣… など

またこの言語では, 抽象名詞はすべて無魂名詞として扱われており, サンタール人の意識では, 自ら動く(位置を変える)ものを有魂, そうでないものを無魂とみなしているように思われる。いずれにせよサンタール語の辞書には, すべての名詞について有魂か無魂かの標識をつける必要があり, 文法書には名詞が有魂か無魂かによって, 代名詞や動詞構文がそれぞれどんな形式と対応するのかを記述しておく必要がある<sup>5)</sup>。

## [2-4] 類別・助数詞

さて, 名詞の意味分類に関連してもう一つ取り上げなければならないのは, 類別詞・助数詞の問題である。

この品詞は, 数の多少の差こそあれ, ほとんどすべての言語に見られる言語形式で, 主として名詞によってあらわされる対象の形状や大きさや性質によって分類されるが, それが文中において他の範疇に属する形式と呼応することはない。

例えば日本語には, 次のような助数詞がある。

- ①牛, 馬, 熊, 象…頭
- ②犬, 猫, 虫, 魚…匹
- ③鷺, 鳩, 鶏…羽
- ④親, 友達, 生徒…人
- ⑤木, 紐, 鉛筆…本
- ⑥紙, 布, 硝子…枚
- ⑦本, 帳面…冊
- ⑧車, 機械…台
- ⑨鋏, 剃刀, 包丁, 豆腐…丁

⑩水, 酒, 牛乳, 石油…杯 など

このほか, まだまだ数多くの助数詞が挙げられようが, 昔よく使われていたのに現在ではほとんど使われなくなってしまっているものも少なくない(例えば, 箆笥, 長持, 旗, 羊羹…さお; 重箱, 着物…重(かさね); 刀剣…振り, など)。それは生活環境の変化に伴い言語使用者の意識や知識が変化したためであろうが, 依然社会的習慣として通用している上記のような分類基準でも, 言語使用者の個人的判断によって, 対象物をどの範疇に入れるかが変わる場合がある。このことは, 日本語における助数詞の分類は, 外的・客観的な基準によってなされるのではなく, あくまでも言語使用者がどう認識し判断するかという, 内的・主観的な基準によってなされるものであることを, 裏書きしているように思われる。

このことを具体例をあげて説明すると, 例えば①の「頭(とう)」は, 話者が自分の身体より大きいと判断した動物を数える時の形式で, 小さいと判断したものに対しては②の「匹(ひき)」という形式を用いる。したがって同じ豚であっても, 親豚の場合は「頭」で数え, 小豚の場合は「匹」で数える大人がいるだろうし, 大型犬のセント・バーナードやブルドックなどを「頭」で数える子供がいても, 少しも不思議ではない<sup>6)</sup>。

また⑤の「本(ほん)」は, 長い立方体に対して用いられ, ⑥の「枚(まい)」は薄い平面体に対して用いられ, 対象物の素材は判断基準の中には含まれない。したがって, 立ち木や丸太は「本」で数えられ, 板は「枚」で数えられることとなる。さらに動物でありながら鳥類と同じ扱いを受ける「兎」などの例外的な名詞もある。これは, 兎がびょんびょん地上から跳び上がるので鳥と同類と認識した, ということではなさそうである。四つ足を持った動物の肉を食べることがまだ社会的タブーであった頃(江戸時代), 兎を「一

羽、二羽」と数えることによって、動物としてではなく、鶏や鴨や家鴨と同じ範疇に入るものとごまかしてその肉を賞味したという、別の理由があったようである。もっとも現代の若者の大半は、兎を一羽と数える習慣が日本社会にあったことなど全く知らず、今では躊躇なく一匹と数えるのではなからうか。

なお数えることのできる対象物で、上記のどの範疇にも当てはまらないものに対しては、通常「個(こ)」という助数詞が用いられ、抽象名詞に対しては、助数詞を伴わない数詞のみが用いられるのがふつうである。

①卵，蜜柑，茶碗，消しゴム…個

②理想，世界，経験，分類…φ

(一つ，二つ…)

以上の①から②まであげた例を見る限りでは、「頭・匹・羽…個」はいずれも非自立単位の形態素で、しかも数詞の助けなくして単語となることはできない接辞なので、助数辞と呼んだ方がいいのかもしれない。しかしそれはまた、共起する名詞の意味範疇をも提示するので、類別辞としての機能をも同時に果たしているといえよう。

一方、こうした接辞とは異なり、意味範疇を類別する機能は持たず、専ら助数辞としてのみ働く接辞もある(年，月，週，日，歳，度，糧，料…)

ベンガル語の助数・類別辞は、日本語のそれと対照的に数がひじょうに少なく、人間を数える時に使う {jon} と、本や机や車などの物体を数える時に使う {khana} の二つしかない。しかし {khana} をすべての物体に対して使えるわけでなく、自然物(日，月，星，山，川など)とか、ある種の物体(布，牛乳，米など個体では数えられぬもの)に対しては使えないので、辞書では使えるものと使えないものとを識別しておく必要がある。

## [2-5] 感情接辞

さらにベンガル語には、ある対象が特定されたものであることを示す接辞がある。これは、ほぼ英語の定冠詞に相当するものと考えていいが、面白いことにこの接辞には {-ta} と {-ti} という二つの形式がある。

{boi-ta/boi-ti} (本)

{chele-ta/chele-ti} (男子)

{bhafa-ta/bhafa-ti} (言語)

{kotha-ta/kotha-ti} (事) など

{-ti} は、その対象に対して話者が好感を抱いた時に用いられる特定接辞で、特に好感を抱くことなく単に特定するだけの場合は {-ta} が用いられる。

日本語の秋田方言にも、好ましく感じた対象に対して {-(k)ko} という接辞を用いる習慣がある。しかし、これには必ずしも対象を特定する働きはない。

{beko-(k)ko} (牛)

{waraji-kko} (子供)

{hoN-ko} (本) など

このように、話者が自分の言及する対象に好感を抱いているか否かを意識し、それを言語形式に表示するかどうかは、すぐれて言語文化的特徴である。したがって、言語ごとにそうした特徴があるかどうかを調査研究し、記述する必要がある。

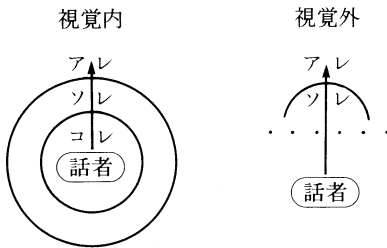
## [3-1] 距離による指示代名詞

次に、指示代名詞の体系を取り上げ、言語文化学的視点から考察してみることにしよう。

まず日本語の「これ，それ，あれ」について言えば、話者の手の届く範囲内にある対象物を指さして「これ」，その範囲外にはあるが指で確実に示すことのできる対象物を「それ」，「それ」よりさらに離れた遠方にあるものを指さして「あれ」という。つまり話者が

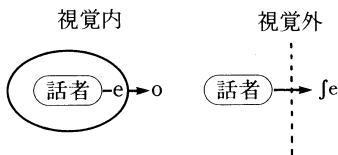


ら対象物までの距離に応じて、「これ」「それ」「あれ」という形式が指示機能のため用いられる。また現実には話者の視覚内にはない対象物を指示する時は、話者のそのものに対する心理的距離に応じて「それ」とか「あれ」の形式が用いられる。



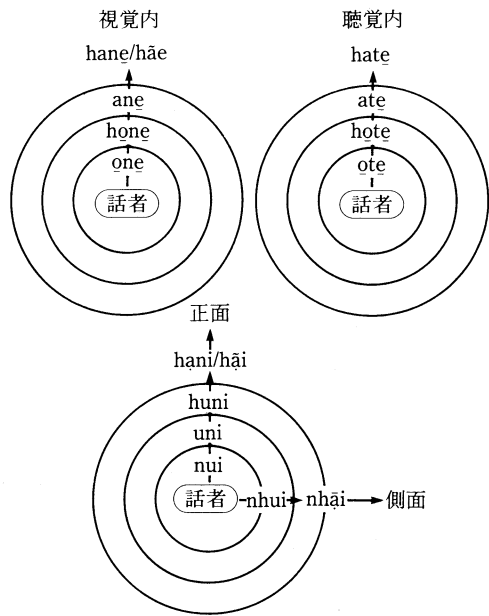
[3-2] 距離・視覚による指示代名詞

一方、ベンガル語にも指示代名詞として三形式があるが {e, o, je}, 話者の視覚内にある対象物を指示する形式 {e, o} と、視覚外の対象物を指示する形式 {je} とに分かれる。そして視覚内形式のうち、話者の手に届く範囲内にある対象物を示すのに {e} が、範囲外にある対象物を示すのには {o} が用いられる。



[3-3] 距離・方向・視覚・聴覚による指示代名詞

さて、以上二言語より遙かに複雑な体系をもっているのは、サンタール語の指示代名詞である。サンタール人は視覚だけでなく聴覚をも意識し、さらに視覚されるものが話者の正面にあるか側面にあるかという方向や、話者から対象物までの距離などを問題にし、三次元的基準によって指示代名詞の形式を選択するという、文化的特徴をもつ。



[4-1] 日・時の区分

次に時間と時制の問題を取り上げてみよう。時間については、例えば、日本人が一日の時間経過をどう分節しているかを英国人やベンガル人のそれと対比させて示すと、次のようになる。

|      |         |      |       |           |
|------|---------|------|-------|-----------|
| dawn | morning |      | noon  | afternoon |
| 夜明け  | 朝       | 午前中  | 昼     | 午後        |
| bhor | ʃokal   | bæla | dupur | bikal     |

|        |         |       |            |
|--------|---------|-------|------------|
| dusk   | evening | night | midnight   |
| 黄昏     | 夕方      | 晩 夜   | 夜中         |
| ʃondhæ |         | rat   | gobhir rat |

また、今日を中心とする前後数日の時間経過に対する認識は、言語形式から推理すると、ベンガル人は過去・現在・未来という一方向の流れとしてとらえるのではなく、今日という時点からどのくらい時間が離れているかと

いう二方向に目を向けたらえ方をしているように思われる。

|                      |     |       |
|----------------------|-----|-------|
| day before yesterday | 一昨日 | porju |
| yesterday            | 昨日  | kal   |
| today                | 今日  | aj    |
| tomorrow             | 明日  | kal   |
| day after tomorrow   | 明後日 | porju |

このことは別に、ベンガル人が過去と現在の違いを意識できない事を意味しているわけではなく、社会的習慣としてふだんはあまりその差に注意を払わないというに過ぎない。したがって必要とあれば、「明日」を {agami-kal} (来るべき kal)、「昨日」を {gato-kal} (行った kal) という風に複合形式で両者の違いを示すことができる。同様に、「明後日」は {agami porju}、「一昨日」は {gato porju} となる。

#### [4-2] 動詞活用形に表われる時間認識と動作の様相

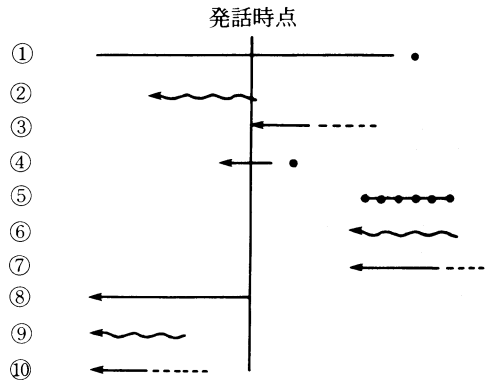
時間認識が、名詞ないし副詞という言語形式によって示されるのに対し、動詞の中の言語形式(形態素)によって示されるのが「時制(テンス)」である。そしてこの形式は、動詞によって示される動作や状態が実現されたものなのか、それともまだ実現されていないものなのか、既に完了してしまったものなのか、それとも未だ完了せず継続しているものなのか、一回きりのものなのか、それとも何回も繰り返しておこったものなのか、などという話者の判断をもしばしば表出する。

そこでまずベンガル語動詞の3人称の活用語尾を示し、それぞれの用法を述べてみよう。

- ①{-e} 現在の習慣、普遍的真理、過去一回の事実
- ②{-cch-e} 現在進行中の事実、確実な未来の事実

- ③{-e-ch-e} 既に終了しその結果(効果)が現在に及んでいる事実
- ④{-lo} 過去一回の事実、現在・近未来の確実な事実
- ⑤{-to} 過去の習慣・繰り返しの事実
- ⑥{-cch-i-lo} 過去進行中の事実
- ⑦{-e-ch-i-lo} 既に終了しその結果(効果)が現在に及んでいない事実
- ⑧{-be} 不確実な現在の事実、今後の事実
- ⑨{-te thak-be} 今後の進行中の事実、強い意志を伴った今後の事実
- ⑩{-e phel-be} 今後の一時点までに終了する事実

上記の用法の説明からもわかるように、それぞれの語尾形式は、一義的に過去・現在・未来という特定の時点を示すだけでなく、むしろ①動作が発話者の時点とどんな風にかかわり、②その動作が時間的にどのくらいの広がりをもっており、しかも③既に終了しているか、それともまだ継続しているかどうか、④一回性か多回性(繰り返し)か、等々、いわゆる動作・状態の「相(アスペクト)」を同時に表示していると言っている。それは、次のように図示できるかもしれない。



これと比較する意味で、スペイン語の活用形式をここで取り上げてみよう。直接法だけに限ってみると、一人称単数の活用語尾とそ

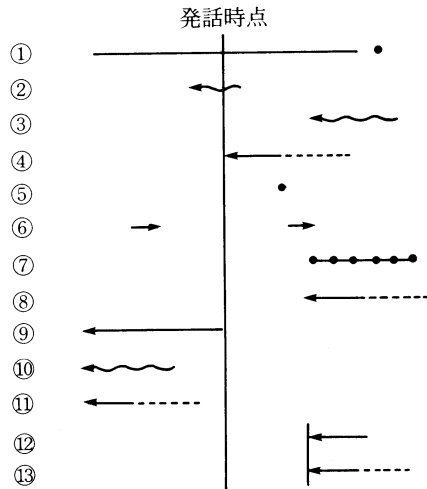
の用法は次のようになる。

- ①{-o} 普遍的真理，現在の習慣，歴史的事実
- ②{estuve -ando} 現在進行している瞬間的事実
- ③{estaba -ando} 過去進行（継続）している事実
- ④{he -ado} 既に終了してその結果（効果）が現在まで及んでいる事実
- ⑤{-é} 過去の一回的事実
- ⑥{hube -ado} ある事実の直前に起こる事実
- ⑦{-aba} 過去の習慣・何度も継続して起こった事実
- ⑧{había ado} 既に終了してその結果（効果）が現在まで及んでいない事実
- ⑨{-aré} 今後の事実
- ⑩{estaré ando} 今後のある時点で進行中の事実
- ⑪{habré ado} 今後のある時点までに終了している事実
- ⑫{-aría} 起こることが期待されていた事実
- ⑬{habría ado} 既に終了していることが期待されていた事実

スペイン語の時制の中でベンガル語のそれには見られない用法をあげると，②，⑥，⑫，⑬などで，②は，ある動作を瞬間的にとらえそれが進行中であると判断したときの形式，⑥は，ある動作が次の動作の直前に起こった事を記述する形式，⑫は，ある動作が起こることが期待されていた場合，⑬は，ある動作が既に終了していることが期待されていた場合の表現形式である。このように，動作の時間幅や動作の時間的順序，さらには期待の心情などに注目して，それぞれ異なる言語形式で表現するという社会習慣は，スペイン人の言語文化的特徴の一つと考えていいであろう<sup>8)</sup>。

なお上の用法は，次のように図示できるか

もしれない。



[5] 動詞の意味

動詞に関連してもう一つ考えられるのは，語彙の意味に関する問題である。二言語間の翻訳を考える際，一方の言語のある単語と同じ意味を有する単語を，他方の言語の中から探し出すのはなかなか容易な事ではない。近似はしていても，意味の範囲が少しずれている方がむしろふつうなのではなからうか。そこでその一例として，英語の put on～take off に相当する動詞を日本語とマラヤーラム語の中から取り出し，両者の意味の対比を試みてみよう。

| put on | 日本語           | マラヤーラム語 |
|--------|---------------|---------|
| 帽子     | kaburu        | vaykkə  |
| 眼鏡     | kakeru        | vaykkə  |
| 飾り     | cukeru        | aṅiyə   |
| シャツ    | kiru          | iṭə     |
| ガウン    | kiru/haoru    | iṭə     |
| コート    | kiru          | iṭə     |
| ベルト    | fimeru/cukeru | keṭṭə   |
| ズボン    | haku          | iṭa     |

|          |        |             |
|----------|--------|-------------|
| 靴        | haku   | iṭa         |
| take off |        |             |
|          | 日本語    | マラヤーラム語     |
| 帽子       | nugu   | uurə        |
| 眼鏡       | hazusu | uurə        |
| 飾り       | hazusu | alikkə      |
| シャツ      | nugu   | uurə/alikkə |
| ガウン      | nugu   | uurə        |
| コート      | nugu   | uurə        |
| ベルト      | hazusu | uurə        |
| ズボン      | nugu   | uurə        |
| 靴        | nugu   | uurə        |

put on (ある物を身につける) という動詞は、日本語の場合、身体の部分に応じて別々の語彙を用いるが (頭 kaburu, 上半身 kiru, 下半身・足 haku), マラヤーラム語の場合、頭だけを別にして、あと上半身・下半身とも同じ語彙を用いる (頭 vaykkə, 上半身・下半身・足 iṭa)。また take off (ある物を身から離す) という動詞は、日本語もマラヤーラム語も、どちらも同一の語彙を用いている (nugu ↔ uurə)。また、マラヤーラム語の {iṭə} は、「頭以外の身体のある部分を、ある物で覆う」という意味を有しているのに対し、日本語では、その意味を {kiru} と {haku} という二つの動詞で分担していることがわかる。

{haku} は、おそらく「下半身のある部分を通して (ズボン, パンツ靴下, 足袋, 靴, スリッパ等々) を身につける」ことを意味し、{kiru} は「首下の上半身のある部分を通して (ワイシャツ, ガウン, 背広, オーバーコート, 着物等々) を身につける」ことを意味していると考えられる。

なお、これは言うまでもないことだが、{dress}, {kimono}, {jari} (サリー) などという、身体を覆う各種衣類の意味内容がそれぞれ異なるだけでなく、それらを身につける動詞 {put on/wear}, {kiru}, {iṭə} の内容も、「身体のある部分の皮膚全体を覆いかくす」とい

う共通点はもちろん、「かくし方, つけ方」は、それぞれみな異なる。こうした意味の差異は、まさしく文化的特徴の差異と密接な関係があり、この文化的特徴を伴った言語的特徴を知らずして、名詞なり動詞なりのほんとうの意味の把握は不可能である。語彙の言語文化的理解が必要な理由が、ここにこそある。

## [6] 数詞の構成

ここでは数詞の問題、特に1から100までの数の構成のしかたを考えてみようと思う。

ではまず、日本語、ベンガル語、サンタル語、フランス語の数の対応表を下に示してみよう。

| 日本語          | ベンガル語    | サンタル語                 | フランス語            |
|--------------|----------|-----------------------|------------------|
| 1 ici        | æk       | mit'                  | un(e)/œ,yn/      |
| 2 ni         | dui      | bar(ea)               | deux/dø/         |
| 3 saN        | tin      | pe(a)                 | trois/trwa/      |
| 4 fi         | car      | pon(ea)               | quatre/katr/     |
| 5 go         | pāc      | mōṭe                  | cinq/sɛk/        |
| 6 roku       | chæ      | turui                 | six/sis/         |
| 7 fici/nana  | fat      | eae                   | sept/sɛt/        |
| 8 haci       | aṭ       | irāḷ                  | huit/qit/        |
| 9 ku/kjuu    | nœ       | are                   | neuf/nœf/        |
| 10 zjuu      | dɔj      | gēḷ                   | dix/dis/         |
| 11 zjuuici   | ægaro    | gēḷ mit'              | onze/ɔz/         |
| 12 zjuuni    | baro     | gēḷ bar               | douze/duz/       |
| 13 zjuusaN   | tæro     | gēḷ pe                | treize/trɛz/     |
| 14 zjuufi    | couddo   | gēḷ pon               | quatorze/katɔrz/ |
| 15 zjuugo    | ponero   | gēḷ mōṭe              | quinze/kɛz/      |
| 16 zjuuroku  | folo     | gēḷ turui             | seize/sɛz/       |
| 17 zjuufici  | fɔtero   | gēḷ eae               | dix-sept/disset/ |
| 18 zjuuhaci  | aṭharo   | gēḷ irāḷ              | dix-huit/dizqit/ |
| 20 zjuuku    | unif     | gēḷ are               | dix-neuf/diznœf/ |
| 20 nizjuu    | bif/kuṭi | bargel/               | vingt/vɛ/        |
|              |          | mit' isi              |                  |
| 21 nizjuuici | ekuf     | bargel mit'/          | vingt et un      |
|              |          | mit' isi mit' /vɛtɛæ/ |                  |

|              |        |                         |                                   |
|--------------|--------|-------------------------|-----------------------------------|
| 31 saNzjuu   | tirif  | pegel/<br>mit' isi gel  | trente/trât/                      |
| 40 fi-zjuu   | collif | pongel/<br>bar isi      | quarante/karât/                   |
| 50 gozjuu    | pōcaf  | mōtegel/<br>bar isi gel | cinquante/sēkāt/                  |
| 60 rokuzjuu  | faṭ    | turuigel/<br>pe isi     | soixante/swasāt/                  |
| 70 fici-zjuu | fottōr | eaegel/<br>pe isi gel   | soixante dix<br>/swasāt dis/      |
| 80 hacizjuu  | afi    | irāgel/<br>pon isi      | quatre-vingts<br>/katravē/        |
| 90 kjuuzjuu  | nobboi | aregel/<br>pon isi gel  | quatre-vingt-dix<br>/katravē dis/ |
| 100 hjaku    | ækfo   | mit' sae/<br>mōte isi   | cent/sā/                          |

以上の言語形式を数字と記号に置き替えて10以上の数の構成がわかるように示すと、次のようになる。

| 日本語       | ベンガル語  | サンタル語         | フランス語   |
|-----------|--------|---------------|---------|
| 10=10     | 10     | 10            | 10      |
| 11=10・1   | 1+     | 10・1          | 1+      |
| 12=10・2   | 2+     | 10・2          | 2+      |
| 13=10・3   | 3+     | 10・3          | 3+      |
| 14=10・4   | 14     | 10・4          | 4+      |
| 15=10・5   | 5+     | 10・5          | 5+      |
| 16=10・6   | 16     | 10・6          | 6+      |
| 17=10・7   | 7+     | 10・7          | 10・7    |
| 11=10・8   | 8+     | 10・8          | 10・8    |
| 19=10・9   | -1     | 10・9          | 10・9    |
| 20=2・10   | 2・10   | 2・10/1・20     | 20      |
| 21=2・10・1 | 1・2・10 | 2・10・1/1・20・1 | 20+1    |
| 30=3・10   | 3・10   | 3・10/1・20・10  | 3・10    |
| 40=4・10   | 4・10   | 4・10/2・20     | 4・10    |
| 50=5・10   | 5・10   | 5・10/2・20・10  | 5・10    |
| 60=6・10   | 60     | 6・10/3・20     | 6・10    |
| 70=7・10   | 70     | 7・9/3・20・10   | 7・10    |
| 80=8・10   | 8・10   | 8・10/4・20     | 4・20    |
| 90=9・10   | 90     | 9・10/4・20・10  | 4・20・10 |
| 100=100   | 1・100  | 1・100/5・20    | 100     |

日本語の数構成と対比してみて気づく他言語の特異点は、ベンガル語では、19, 29, 39, 49, 59, 69, 79, 89が、それぞれ20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90より「一つ少ない」という表現をすること、サンタル語では、日本語と同じ構成形をもつほか、異形態として10位の数字が偶数の場合は20の倍数となり(20, 40, 60, 80, 100)、奇数の場合は、さらにそれに10が加えられる形式をとること(30, 50, 70, 90)、フランス語では、80が4・20, 90が4・20・10と表されること、などである。日本語とベンガル語が10に、フランス語が20に、それぞれ重点を置いているのに対し、サンタル語はその両方をとり入れている、と言えよう。

このほか、ベンガル語には1+1/4, 1+1/2, 2+1/2を一つの単位として扱う形式があり、こうした数に対する概念の違いが、他の言語文化的特徴とどんな関係を持つのかは、将来の興味ある研究課題となることであろう。

### [7] 慣用語句

さてこれまでは、主として形態素や単語の形態・意味・用法などを言語文化学的観点から分析し、記述してきたが、最後に文表現や文中の統語関係を中心に、いくつかの例について言語文化学的考察を加えてみたい。

一つは、待遇表現に関連する問題であるが、例えばベンガル語では、夫が自分の妻の行動を第三者に報告ないし陳述する場合、次のような表現をとる。

ama-r stri ekṭu age baire  
私ノ 妻ハ 少シ 前ニ 外へ  
gæ-ch-en  
行カレマシタ (=外出サレマシタ)  
uni ækhon ranna kor-ch-en  
アノ方ハ 今 料理ヲ シテオラレマス

もしこの表現を日本人が聞いたら奇妙な感じがするに違いない。それは、日本人は自分の家族のことに関しては第三者に対して常に

謙讓表現をとって報告ないし陳述する、という社会習慣が確立しているからである。反対に、もし日本人のふつうの表現である

「家内ハ少シ前ニ外へ出カケマシタ」  
「アレハ今料理ヲシテイマス」

という文をベンガル人が聞いたなら、これまた全く奇妙な感じを受けるに違いなく、夫の妻に対する非礼な態度に腹を立て不愉快な思いにかられることであろう。

こうしたコミュニケーションの行き違いが、文法的・統語論的に全く正しい言語形式であるにもかかわらず生じるのは、まさに社会的習慣、家族関係に対する文化的認識の差に基づくものであることは明かである<sup>9)</sup>。

またサンタール人が、知人に

ale [ʔen nāwā peʃa-ko hecʔ akan-a  
私達 = 新シイ 友人ガ 来 マシタ

と告げ、その知人が

cele-kʔ-ako dipil se bhari-aʔ  
ドンナ人カ 頭運搬人 ソレトモ 肩運搬人

と質問した場合、サンタール人社会の文化的特徴を知らない人は、そのまま文字通りの会話として受けとってしまうかもしれぬ。しかし、サンタール人の間では、これを

「私達に赤ん坊が生まれました」  
「それは男の子ですかそれとも女の子ですか」

という意味にとるのがふつうである<sup>10)</sup>。

こうした例は、諺や慣用語の解釈にも当てはまり、言語理解と文化理解とを切り離して考えては決して真意をつかむことは出来ないであろう。言語文化学構築の目的と効用性は、実にここにこそあるのである。

## 註

- 1) ベンガルの動詞 {jan-} (知る) の活用形について検証してみると、英語と同様現在形をとることは可能であるが、日本語のように現在進行形をとることはできない。

tumi ki e-ʔa jan-oʔ  
君は か これを 知る (現在形)  
hæ jan-i  
うん 知る (現在形)  
na jan-i na  
いや 知らない (現在否定形)  
\*tumi ki e-ʔa jan-ch-oʔ  
君は か これを 知っている (現在進行形)  
\*hæ jan-ch-i  
うん 知っている (現在進行形)  
\*na jan-ch-i na  
いや 知らない (現在進行否定形)

もっとも複合動詞であれば、現在進行形をとることは可能である。

tumi ki e-ʔa jen-e ni-cch-oʔ  
君は か これを 知ろうとしている (現在進行形)  
hæ jen-e ni-cch-i  
うん 知ろうとしている (現在進行形)  
na jen-e ni-cch-i na  
いや 知ろうとしてはいない (現在進行否定形)

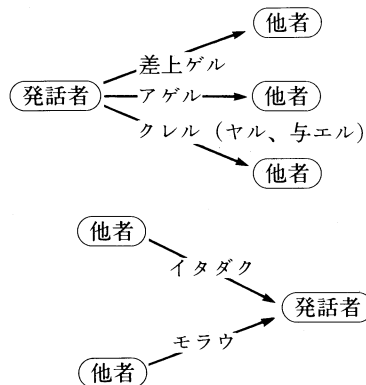
また現在完了形は、言語文化的に使用可能であるのに対し、過去完了形は不可能である。

tumi ki e-[a jen-e-cho?  
君は か これを 知りました (現在完了形)  
hāē jen-e-chi  
はい 知りました (現在完了形)  
\*tumi ki e-[a jen-e-ch-i-le?  
君は か これを 知っていました (過去完了形)  
\*hāē jen-e-ch-i-lam  
はい 知っていました (過去完了形)

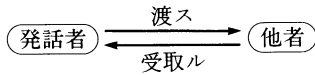
{jan-} のほかに {ghuma-} (眠る) という動詞も、現在進行形は不可能で (\*ghuma-cch-o), 複合動詞においてのみ可能となる (ghum pa-cch-o)。なおタミル語のいくつかの動詞の活用について検証してみると、次のものが、文法的には正しいのに、社会習慣としては決して受け入れない形式であることがわかる。

{iruppu-} (気楽にする)  
{\*iruppukko} (命令形)  
{\*iruppukkoŋu} (分詞形)  
ただし {iruppukko}a:mal (分詞否定形) は可能。  
{kaŋ-} (眼がかさむ)  
{\*koŋjiru}ukiratu (現在形)  
{\*koŋjiru}um (未来形)  
ただし {kaniruŋ}atu (過去形) は可能。  
{va:lntu} (住む)  
{\*va:lntukoŋ}e:n (過去再帰形)  
{\*va:lntuko}kire:n (現在再帰形)  
{\*va:lntuko}ve:n (未来再帰形)  
ただし {va:lntukoŋ}irukkire:n (現在進行再帰形), {va:lntuko} (命令再帰形) は可能。

- 2) 日本では、目上の人に対して、「あなた様」という2人称敬称の形式で呼びかけるよりも、相手の氏姓に「様」を付した形式(「佐藤様」、「高橋様」など)や、一般敬称としての普通名詞(「先生」、「社長」、「叔父様」など)を用いる方が自然な形式として受け入れられる社会習慣が確立している。なお、待遇表現と関連して動詞形式が変わるもう一つ別の例として、語尾形式の変化ではなく、語彙そのものの交替がある。例えば発話者と他者との間における所有権の移譲を伴う物の移動は、両者間の心理的地位の差に応じて、それぞれ次のような動詞が用いられる。



ただし所有権の移譲に言及せぬ単なる物の移動の場合は、次の動詞を用いる。



- 3) 肯定質問文の「君はこの男を知っているかい」と、否定質問文の「君はこの男を知っていないかい」は、どちらも発話者が相手に対し「この男を知っているかどうか」の事実を確かめるために質問する表現形式である。ただし肯定形が、事実について単純な質問をする時に用いられるのに対し、否定形は、ひょっとしたら相手は「この男を知っているかもしれない」と想定しつつ、ある種の期待をこめて質問する時に用いられる傾向にある。
- 4) スワヒリ語では、名詞がいくつかの種類に分類され、それが文中に現れる場合、どの種類に属するか、単数が複数かによって、次に示すような特定の接頭辞をとる。(cf. 三省堂「言語学大辞典」第2巻 pp. 381-382)

|   | 単 数        |            | 複 数     |         |
|---|------------|------------|---------|---------|
| ① | m̄-tu 人    | m̄-zuri 良い | wa-tu   | wa-zuri |
| ② | m̄-ti 木    | m̄-zuri    | mi-tiwa | mi-zuri |
| ③ | ji-cho 目   | Ø-zuri     | ma-cho  | ma-zuri |
| ④ | ki-chwa 頭  | ki-zuri    | vi-chwa | vi-zuri |
| ⑤ | n-gno 着物   | n-zuri     | n-gno   | n-zuri  |
| ⑥ | u-so 顔     | m̄-zuri    |         |         |
| ⑦ | pa-hali 場所 | pa-zuri    | pa-hali | pa-zuri |

ただし人間と動物を表わす名詞に形容詞がつく場合、形容詞のとり接頭辞は、単数の場合は m̄-, 複数の場合は wa- と二つに限定される。

Ø-baba (父) m̄-kubwa (大きい) = 大きい父 = 父方の伯父  
 vi-faru (サイ) wa-kubwa (大きい) = 大きなサイ (複数)

ただ、どの名詞がどの種類に属するのかは、スワヒリ語の母語使用者にしかわからないので、辞書にはすべての名詞について、それぞれの種類を記述しておく必要がある。いったい何が分類基準になっているのかを探ることは、まさしく言語文化学の研究課題となるであろう。

- 5) 代名詞以外にも、動詞の能動態構文の中で、直接目的語が有魂であれば人称接中辞として現れるし、無魂であれば現れないという差異がある。
- 6) タミル語でマンゴー {man} の苗木を {topu} と言うが、砂糖きび {karambu} やバナナ {valai} の苗木は {totam} と言う。この違いは、苗木が多年生植物か一年生植物かの差異に基づく。また動物の総称としては {kandle} があるが、人間より大きな体を持つ動物には {pillai}, 小さな体を持つ動物には {cesi} が用いられる。
- 7) 月と日の間の区分を示す言語形式として、日本語、英語、ベンガル語には、それぞれ次のようなものがある。

|   |       |           |         |     |
|---|-------|-----------|---------|-----|
| 英 | month | fortnight | week    | day |
| 日 | 月     | 旬 (10日間)  | 週       | 日   |
| ベ | maf   |           | ʃoptaho | din |

- 8) 日本語の動詞活用語尾の形態とその用法 (時制・相) は、次のように考えられる。

- ①{- (ru)u} 現在の習慣、普遍的真理、確実な未来の事実  
 ②{te i-ru} 現在進行中・継続中の事実  
 ③{te a-ru} 既に終了しその結果 (効果) が現在に及んでいる事実  
 ④{ta} 過去一回の事実  
 ⑤{ta mono da} 過去の習慣



- ⑥{te i-ta} 過去進行中・継続中の事実
- ⑦{te aʔ-ta} 既に終了しその結果（効果）が現在に及んでいない事実
- ⑧{-(r)u da-roo} 不確実な現在の事実，今後の事実
- ⑨{te i-ru da-roo} 今後の進行中の事実

以上の用法をベンガル語とスペイン語の用法と対比させた場合，一見してベンガル語のそれに近似していることがわかる。ただ僅かな違いは，①の用法の一部が異なることと，⑩の用法に相当する形式が日本語には見当たらないことである。

- 9) 家族関係を表わす，いわゆる親族名称の中で，ベンガル語の {ʃala}（義理の弟，妻の弟）という単語が，単に親族名称として用いられるだけではなく，他人を罵る時にも用いられる理由は，義理の弟が親族の中に占める地位ないし価値が非常に低いという，ベンガル人社会の文化的特徴の中に求められる。

また自分の兄弟に対してと，自分の父方の伯父・叔父の息子（即ち，従兄弟）に対して，全く同じ呼称を用いる理由は，ベンガル人の大家族制度を知らずしては理解できないであろう。つまり大家族制度の下では，父の家族も叔父，伯父の家族も同じ屋根の下に住み，同じかまどの飯を食う風習があるので，それら家族全員は同じ家族の構成員という意識をもち，子供達は本当の兄弟のような感覚で互いを呼び合う。もしどうしても自分の本当の兄弟と，従兄弟とを区別して紹介する必要のある場合は，前者を {apɔn bhai}（自分の兄弟）と言う。

- 10) ベンガル語の慣用句に

ama-r matha dhor-e-ch-e

私の 頭を つかまえた

という表現があるが，これは「私は頭が痛い」という意味である。もしも本当に「誰かが私の頭をつかまえた」という表現をしたかったなら，必ず主語が明示されなくてはならない。

oi chele-ʃa ama-r matha dhor-e-ch-e

あの 男の子が 私の 頭を つかまえた

このほかにも，諺や謎など，言語文化学の対象となる言語資料は数多く存在する。